

翻訳：ダニエル・ツァーノの短編小説 『ヒソヒソ話』

萩野 静男

前書き

はじめにスイスの作家ダニエル・ツァーノ (Daniel Zahno) について、簡単な紹介をしておきたい。この作家のことは、わが国ではあまり知られていないと思うからである。

ツァーノは1963年にスイスのバーゼルで生まれ、現在も同市に住んでいる。親元からバーゼル大学に通い、ドイツ文学と英文学を専攻し、カール・ベスタロッチ教授のもとで蝶の象徴的意味をテーマとする修士論文を書いた。

彼の作家としての評価が高まったのは一九九六年にその短編集『ターバン博士』(*Doktor Turban*¹⁾) が世に出てからである。この年「ヴェルト賞」(Würth-Preis)、「テュービンゲン詩学賞」(Tübinger Poetikpreis)が、一九九七年にはハイデルベルク市の「クレメンス・ブレンターノ賞」(Clemens-Brentano-Preis der Stadt Heidelberg)がツァーノに授与されている。そこに収められている様々な物語の冒頭に置かれているのが『ヒソヒソ話』である。この作品は非常に凝った丹念な書き方がなされており、芸術作品として高い完成度に達しているように思われる。

この物語の舞台を確定することはできないが、ツァーノの母国を物語の背景に想定するとすれば、それを二十世紀スイスのドイツ語圏地域と仮定すること

¹⁾ Zahno, Daniel: *Doktor Turban. Erzählungen.* btb Taschenbuch (Goldmann). なおこの「前書き」及び後出の「後書き」は、2007年7月21日に明治大学にて開催されたスイス文学研究会における『ヒソヒソ話』に関する研究発表を基礎に、執筆されたものである。

は可能であろう。そうだとするならば、その時代のその地域は隣国ドイツの強い影響下にあったことが、この作品において示唆されていることになる。このことはドイツ文学史の書物をひもといても、ほとんど記述されていない。してみると、従来こうした事情にあまり関心が払われてこなかったことになるであろう。しかし二十世紀のドイツ語圏スイスのあり方を考える場合、ドイツからの影響を看過することは妥当ではないであろう。

過去のナチス時代のメンタリティーが、この短編において大きく反映されているものと思われる。それはこの作品の登場人物の中では特に父親の形姿をとって現れている。主人公の少年に対する家庭内での父親の圧倒的存在感、その迫力、圧迫感、権威は読む者の関心をひかずにはまい。その叙述の筆致もまた非常にしつこいものなので、この父親の形姿の与える嫌悪感は増幅される。息子の少年は彼のもとで身を縮め、小さくなっているしかない。ただ他方でそのような父親が徴兵検査において不合格とされ、社会では虚弱者扱いを受けている。家庭における暴力的ともいえる父の圧制は、社会におけるコンプレックスの裏返しともいえるであろう。

この父親の職業がまた肉屋という設定なので、彼が包丁で屠殺動物の肉を切る描写や斧を動物の骨に打ち下ろす描写はなんとも生々しい。物語の中ではそういうときに動物の血と肉片とが飛び散りその臭いが漂うので、よけいに生々しくなる。

論点を整理してみよう。この短編は、二十世紀における父権社会、中産階層の心性（ここでアドルノのいう権威主義的パーソナリティーを持ち出してもよいだろうか²⁾）、暴力、圧制、エロスといったテーマをめぐるものと推察される。ただこの作品はそれ以前の文学史上のテーマも継承していることは明らかである。すなわちカフカやホーフマンスタール、トーマス・マンといった作家の自

²⁾ Adorno, Theodor W.: *Studien zum autoritären Charakter*. Übersetzt von Milli Weinbrenner. Vorrede von Ludwig von Friedeburg. Frankfurt am Main (Suhrkamp-Taschenbuch Wissenschaft 1182) 1995.

伝を考慮してみれば、それは明白になる。肉体的にも精神的にもたくましい実業家的性格を持つ父親と、他方で心身ともに虚弱な息子。前者はサディスト的、後者はマゾヒスト的と形容することも可能であろう³⁾。この図式がツァーノの短編にもあてはまるものと考えられる。

作品としてはどうであろうか。たとえば家庭内で圧倒的存在感を持つユダヤの父親像を描くカフカの短編『判決』⁴⁾は、虚弱な体質・気質の息子の自殺で幕を閉じている。他方ツァーノの『ヒソヒソ話』は父親の死で終わる。両短編の結末に相違はあるが、ともに主要登場人物の死を終わりに置き、さらに父に対する息子の愛情告白で物語を締めくくるという点で、両者は一致している。このあたりにカフカの影響を推定することはあまりに早計であろうか。

また『ヒソヒソ話』という短編小説の根底に存在する聖書の形姿、すなわち放蕩息子ないしアハスヴェールも、読者の注意をひくであろう。父親という人生の模範にならった人生を送れない息子、虚弱ゆえに家業の肉屋の包丁や斧を使用できない息子。使用人の女性との情事を息子に見られたがために、家庭内での権威を失墜した父親。その結果人生の模範を喪失し、タクシー運転手として日夜移動する生活を送らざるをえなくなった息子。ここにさまよえるユダヤ人の現代版を見てとることは、ゆきすぎた解釈となるであろうか。

最後になぜツァーノの短編集を訳すことになったか、その経緯について一言述べておきたい。わたしの記憶をたどるならば、彼と初めて出会ったのはたぶん二〇〇五年の夏であったように思う。その頃ドイツに研究上の所用があり、留学時代からの友人のもとを訪問すると、ツァーノも招かれていた。ずいぶん控えめで慎重な男だな、というのがそのときの印象であった。あれこれと思いつきをすぐに自己主張するタイプとは違い、頭の中で時間をかけた上で話をするか、もしくは何も言わなかった。別れ際に献呈としてもらったのがポケッ

³⁾ A.a.O., S. 322 – 327 (*Das >autoritäre< Syndrom*).

⁴⁾ Kafka, Franz: *Das Urteil*. In: ders.: *Erzählungen*. Hrsg. von Max Brod. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1992, S. 43 – 53.

ト・ブック版の『ターバン博士』で、その時は電車の中でパラパラとめくってみる程度だった。たしかに優れたドイツ語を書く男だな、とは思った。翌年のドイツ語上級のクラスでテキストとして採用したのがここに訳出した『ヒソヒソ話』だが、熟慮の結果としてこの短編を教材に選んだわけではなく、手元にあるので軽い気持ちでこれを学生諸君と読もうと決めた次第である。ただ授業で読み進めるうちに次第に見方が変わり、これと本格的に取り組むようになった。

前置きはこのくらいにして、次にその物語の翻訳を読んでもらうこととする。(なお後書きもあるので、以下の翻訳を読んだ後に是非そちらも参照されたい。)

翻訳

もともと話すことは少ないのです、お嬢さん、^{マドモワゼル}とても少ないのです。わたしの父は肉屋でした。わたしたちはヴェディング通りで小さな肉屋を営んでいました。もしかするとそのお店をあなたは思い出せるかもしれませんね。わたしはそのころ九歳か十歳でした。その店の壁はすべて白いタイルで覆われていたのです。父の商品は他の肉屋の商品と比べ、良くも悪くもありませんでした。お店の奥の部屋には小さな屠殺台があって、いくつかの鉄製の鉤やそれにぶらさげられた動物の体、あらゆる大きさの斧や包丁があったのです。壁には血のついた二三枚の前掛けがかけてあり、ドアの横には父の大きな長靴が置いてありました。

そのお店はまあまあうまく行っていました。わたしの母が接客をしていましたが、たいてい彼らはその街区の平凡な人たちで、主婦や老人、労働者たちだったのです。彼らを買っていたのは特にソーセージ——それはブラッド・ソーセージ、レバー・ソーセージ、焼きソーセージでしたが、ときにはまたハム、ベーコン、すね肉あるいは稀にでしたがステーキでした。わたしたちはそ

のお店と同じ家屋の階上に住んでいました。それゆえ屠殺の際に起こるいろいろな物音や肉と血との臭いが、とても幼いころからわたしに付きまとい、わたしの本性はそのような赤く重々しい雰囲気の中に浸かっていたのです。子牛たちの鳴き声、ほとぼしる血、刺殺法による動物の屠殺——こういったものにわたしは親しんでいたのです。それはわたしの子供時代の暗い響きとなっていました。なぜ自分が後に素食主義者になったのか、わたしには言えません。こういう臭いやこういう物音に、わたしはもはや耐えられないからかもしれません。もしかするともはや耐えられないのは、わたしの父だけなのかもしれません。

あなたがわたしに尋ねている出来事はずっと昔のことです。今日あなたと一緒にオペル車に乗って街中をまわり、あなたを駅からホテルへ、ホテルから駅へ、そこからどこかへ運んでいると、こういった過去のすべての事柄はわたしやわたしの生活とは何も関係のないように思えてきます。そのことを考えると、深い不快感に襲われるのです。あなたの質問はわたしを苦しめていると白状せざるをえません。あなたの質問に対するわたしの答えもまたわたしを苦しめるとわかっていますから、あなたはわたしを苦しめるのです。それどころか根本的にわたしにはすべてが苦痛ですし、あなたの沈黙もしくはわたしの沈黙もまた、苦痛となるでしょう。

でもあなたは今わたしの車の後部座席に好奇心に満ちてすわり、出さずにはいられない質問をしてきています。あなたは正しい。あなたはきっともう長い間この瞬間を待ち続けてきたに違いありません。おそらくあなたはこれに対し、極度に綿密な準備をし、あらゆることに対し、最悪のことに対しても、覚悟ができていなのでしょう。あなたはわたしに二枚の高額紙幣を握らせ、タクシーセンターへの無線を切るように合図したのです。わたしが行きたいところに行くように指示しました——車を走らせ、物語るように指示したのです。よろしいですとも。わたしはゲームを台無しにするつもりはありません。それがあなたにとっても重要だとすれば——あなたには重要なように見えますね。とい

うのも、もしそうでなければ、あなたはこの長い旅に出ることはなかったでしょうから——わたしには困難に思えても、回想してみたいと思います。

すべてはあの暑い夏に始まりました。そのときラジオから突然とても恐ろしい戦争の雄たけびが響き始め、全群衆の固まりが広場に集結したのです。それから彼らは歓声をあげ大声で叫びながら通りを行進したのです。たとえ父がすでに早くから喘息のために徴兵検査で不合格にされていたとしても（このことは彼の心を苦しめたのです）、彼もまた時折こうした不穏な一団と通りを行進していました。そういうわけで彼はこのせかせかした日々には、わたしにかまう時間が普段よりはるかに一層少なかったわけです。いやそれどころか、本来彼にはわたしのための時間が決してなかったのです。彼はたいてい動物の屠殺や臓物抜き、豚の切り分けや細切れに携わっていました。あるいはその後でまさにかの群衆の集まりや政治集会に共に出席し、スローガンを叫び、ビールを飲み、豚野郎どもとは違った自分を際立たせていました。そういうわけで彼は夕べにはたいてい家にいませんでしたが、もし彼が家にいる場合には、消耗しきってうつろな様子だったのです。そのタイプからして力強く、性格は粗野で物腰鋭く、その顔の黒い肌だけでもう彼は目立っていました。彼の全存在は肉屋としての存在でした——白い前掛けをし、義務を意識し、勤勉かつ真摯、黒い肌をし、太って力持ちで誇り高く、がっしりした体つき、背は高く肩幅がありました。そして周りの人がただ十分に身を細めて体をちぢめ、虚弱で背が低い場合には、彼のそばには広い空間ができ、彼のそばには常に広い空間ができたのです——でもお嬢さん、こんなことはほとんどあなたの興味をひかないでしょうね。しかしもしもわたしが、父の肉付きの良い両耳から強大な毛の束が生えていることを付け加えるとしたら、それはあなたに何事かを物語るかもしれません。この毛の束を彼はいかなる事情があれ、刈り取りませんでした。というのも彼は自分の毛の生えた指をこの毛の束に突っ込み、それをこねくり回すことが好きだったからです。そういう時、彼の指の毛と耳の毛とが一体になって一つの大きな毛の束と化したのです。この毛の束から引き出すのが常で

あった黄褐色の脂肪塊を、あらゆる側から丹念に眺めた後、きっちりと紐を締めた自分のズボンに入念にこすり付けて落とししたのです。特に好んだのは、食事の際に自分のきっちりと紐を締めたズボンの上にこすることでした。

父がわたしを憎んでいたとか好きでなかったとか、言うことはできません。わたしは彼にはどうでもよかったのです。おそらく彼の無関心はむしろ、みずからの血筋をひくわたしに対する回避心、接触無能力、奇妙な物怖じだったのでしょう。わたしが彼から何かを求めるとき、彼はたいてい厳格な肉屋のまなざしでわたしを寄せつけませんでした。時折彼は何か意味不明のことを部屋の中にぶつぶつ言い散らすこともあり、それに添えてそわそわした身振りをし、まったくあっさりとわたしの質問を聞き流し、それから何か別のことについて話すのです。それは彼にとって興味あることなのですが、わたしには興味のないことでした。そういうわけでわたしは早くから、自分を軽蔑するようになりました。今日なおわたしは会話に際し、単純に話を聞き流されたり、注意を払われていないとか、それどころかわたしは自分で自分の話を聞き流したり、みずからに注意を払っていないような気さえるのです。わたしが早朝仕事の後自分のタクシーで家路につくとき、車の向きを突然変え、狂人のように猛スピードで反対方向に走り出すことも十分ありえるのです。

でもその頃わたしはまだハンドルを手にしておらず、身を縮め小さくなって机に座り、静かに押し黙って机に座り、無視されて机に座っていたので、泣いたり、叫んだり、殴ったりもできたでしょう。今日わたしは父を根本的には完全に理解できるのですよ。わたしが彼の息子、彼のそんなにも違った体質の息子であることに対し、彼はどうすることができたでしょうか。彼があんなにも大きく強く体格が良いのに、わたしがこんなに繊細で小さいのに対して、彼はどうすることができたでしょうか。

いいえ、わたしは彼を非難しているわけではありません。一緒にとる昼食以外にわたしたちの道は、わたしたちの世界はほとんど相互接触がなかったのです。わたしがいつか彼の店の跡を取るだろうという彼のわずかな希望も、包丁

や斧と接する際のわたしの異常な不器用さによって、そしてわたしみずからに出血を伴う深い傷を負わせるというわたしの離れ業によって、すでに早くから刈り取っていたのです。そんなとき夢にふけるようにわたしはこんこんと血の湧き出る自分の傷や、生々しい出血を凝視し、幸福を、めったにない幸福を感じていました。わたしが彼の跡取りになって彼の大きな黒い長靴を履く意志のないことを、彼は決して理解しなかったのです。ただ一度だけでも彼の強大な肉屋の手のぎごちないやさしさを感じることを、ただ一度だけでも彼の毛深い指がわたしの髪の毛にやさしく触れ撫でてくれるのを一瞬感じること——このようなことがわたしの子供時代にはずっと拒絶されたままでした。そして後にわたしが大学の学業を中断シタクシー運転手になったとき、わたしの夢のまた夢は永遠に夢のままに終わったのです。そのことで彼はわたしを決して許さなかったからです。

でもお許しください、お嬢さん、わたしは本題から逸れています、あなたの質問は完全にではないにせよ、別の方向を目指していましたね。わたしはそこに戻りましょう。つまりあの騒々しい夏に母が、この国の最南端の突出部分にある遠くはなれた場所に住む彼女の姉妹を訪問するために、旅に出ることが起こったのです。そこで父とわたしとは、店と家との小間使いであるマリーとともに、単独で取り残されたわけでした。わたしはまだ母の別れ際を、わたしのひそやかな悲しみを、わたしの涙を、母のハンカチと父のはしゃいだ気分——いったい二週間が何なのだい——をよく思い出すことができます。わたしはこの二週間ができるだけすみやかに経過することを希望していましたし、父とわたしとがどうにかして折り合いをつけることを希望していました。彼が少なくとも母の不在の間はその冷淡さをいくぶん払い落とし、わたしたちが少なくとも当座の間は一種の共同体を——まさに結託して作ったものではないかもしれないけれども、やはりある程度は耐えられるものを——形成することを、希望していたのです。

最初の間は母の旅立ちが事実、わたしたちの関係をまったく驚くべき仕方

で、呼び起こしたのです。父は尋常ならざるおしゃべり屋になり、ほとんど付き合いやすい性格に変わり、上機嫌でお店に立ち、指の丸い先端のすぐ近くで包丁をすばやく動かしながら、ソーセージをスライスしていたのですが、そういう時わたしに再三再四ひと切れまた一切れと薄い輪となったソーセージを投げってくれるのです。それから彼は物想いに満ちた表情で自分の軍隊奉公時代のことを語り、過去のものとなった自分の兵隊気質をつかみどころのないような仕方で描写し、勇敢さと冒険とに満ちた話をでっち上げたのです。他方彼は小さな斧をすばやく巧みに骨や生温かい肉に打ち下ろしていたので、ときどき肉の細切れが飛び散り、パシャンという小さな音とともに白い平らな壁にぶつかってそのままぶら下がったままになることもありました。父の眼と唇とがわたしを解放してくれたとき、わたしもまた飛び上がってその場から立ち去りました。というのもわたしは彼の軍隊奉公話の中に、じっとしたまいたくはなかったからです。だってわたしはすでに子供の頃に灰色で騒々しいあらゆるものに対し、深い嫌悪感を抱いていたからです。今日なおどこかでこちらにじっと眼を注ぐ兵隊たちに会おうとか、誰かが鋭い口調でわたしを叱責すると、わたしはぎくっとするのです。自分のずいぶんな感じやすさのために、時折わたしは静けさの中ですら、突然縮みあがるのです。けれどもお嬢さん、また脱線していますね、わたしのおしゃべりをお許しください。

つまり日々はすばやく過ぎ去っていきました。そこにブレードがあって、あそこにお話があって、わたしはすべてがそれほど悪くはないということで、うれしかったのです。それからわたしの忘れることのできないあの夜がやってきたのです。わたしは眠れませんでした。どうしてかはわかりません。一日中歩き回っていました。港やわたしたちの住む市区をうろついていたのです。疲れくたばっていましたが、眠りにつくことはできなかったのです。ベッドの中でころげまわり、あちらへこちらへと身体を捻ったり振ったりし、高速道路——猛スピードで走り去る車——を思い浮かべようとしましたが、ふだんは短時間のうちに夢の国にわたしを運んでくれるものが、この夜は何の効果

も、まったく何の効果ももたらさなかったのです。それは深夜を過ぎた頃でした。わたしは比較的長い間天井を——水のしみをにらみつつ——凝視していたのです。突然起き上がり、窓をあけ、まん丸で白い月の光がわたしに向かって輝いていたときでした。雲がそれを覆うように移動していき、それからふたたび月が露になったのです。中庭は青白い光のなかにひたされていました。突然わたしはヒソヒソ声を聞いたのです。奇妙ですが、なんとなく慣れ親しんでいても、同時にまた未知でもあるヒソヒソ声を。それはわたしの心に独特な仕方でも触れるものでした。わたしは身をすくめました。それから窓から身を乗り出し、耳を傾けました——そうです、するとまたそれを耳にしました。このささやき声を。それは一階下の屠殺室から来ていたのです。真夜中少し過ぎのささやき声です。不安がわたしをとらえました——混乱と興奮とが。静けさ、それはほとんど感知できない静けさでした。するとまた、それはやってきました——このヒソヒソ話が。そして耳をそばだて、そばだて、そばだて、そばだて、ついにそれを、このヒソヒソ話が誰のものであるかを知ったのです——それはわたしの父のヒソヒソ話でした。まだ決して聞いたことのない、決して聞いたことのない、彼のヒソヒソ話を聞いたのです。その時彼は、確かにヒソヒソ話をしていました。わたしにはこのヒソヒソ話が異様なもの、とても異様なものだったので、彼がいったいなぜそんなふうヒソヒソ声で話をするのかと自問していました。夜中すぎに屠殺室でなぜヒソヒソ声で話をするのか、そこにヒソヒソ話をするような何があるのかと。けれども父のヒソヒソ話の後で二つめの、別のヒソヒソ話——父のヒソヒソ話に対して答えるもの——が聞こえました。それは女性のヒソヒソ話のように思えたので、何千という考えがわたしの脳裏をよぎり、それから明白になりました、お嬢さん、おわかりですね、明白になったのです。マリーのことが思い浮かびました。もちろんですとも、マリーでした、あの女の子、あの女の子の豊満な唇です、それはあの女の子の豊満な唇から来るヒソヒソ話でした、マリーのヒソヒソ話です。それは父のヒソヒソ話をしばらく黙らせた後にみずからも沈黙した、あの女の子の豊満な唇

から来るヒソヒソ話でしたが、屠殺室にはふたたび静寂が戻ってきました。しかしわたしの頭の中ではその部屋の白い壁がぐるぐると旋回し、鉄製の鉤が回るのが見え、静寂が渦をまき、あちこちに渦をまき、動物の頭部や豚の心臓が渦をまいていました。そのとき突然また始まったのです、ヒソヒソ話が、父のヒソヒソ話が。それに対して応えるマリーのヒソヒソ話もふたたび始まり、父のヒソヒソ話とマリーのヒソヒソ話とが混じりあい、入り混じって一つの大きなヒソヒソ話になったのですが、それはわたしが少し理解できるほどの大きさにはなりません。お嬢さん、それほど大きくはなりませんでした。ともかくこの一つの大きなヒソヒソ話を、この父=マリーのヒソヒソ話、このマリー=父のヒソヒソ話を聞き取ったので、奇妙な感情を抱きました。おわかりですね、お嬢さん、奇妙な感情です。それから突然より大きくなりました、このヒソヒソ話はより大きくなったのです。いやそれはほとんど喘ぎ声、呻き声となったので、もうわたしの部屋でじっとしていられなくなり、外壁の蛇腹部分に上がり、窓の右側の雨どいをつかみ、ゆっくりと下へ、中庭へとすべりおりました——そこで、この屠殺室で夜半すぎに何が起きているのか、これが、このヒソヒソ話がいったい何なのか、この喘ぎ声は、これはいったい何なのか、見るために。下の中庭に立ったとき、脈拍は何と猛烈に速くなったことでしょう、不安、興奮、好奇心のために。半分開いていた屠殺室の窓の下に慎重に忍んで行き、身をかがめました。みずからに、みずからの怖いもの知らずに、みずからの好奇心に、みずからの激情にびっくりしました——わたしは身動きしませんでした。それから勇気をふりしぼり、思い切って中をのぞきました。淡い光の中に屠られた豚の幻のごとき影が（それは後ろ足をひろげた格好です。どい鉤に引っ掛けられていました）、のこぎりで切り取られた動物の頭部の影が、はらわたが、肺翼が、腎臓が見え、ずっと奥には二三枚のはがれた皮が、わたしにもっと近い所には骨でいっばいの大樽が見えたのです。それからわたしは部屋の中央にある大きな屠殺用の台の上に父の身体の輪郭を認め、この輪郭が奇妙にいたりきたりする影のように見えたのでした。彼の体の下には何

かが横たわっていたのです。何かしら肉のかたまりが彼の下にあり、それはある一塊のもので、その上で彼は「・・・」喘いでいました。わたしは度を失ってその場面を凝視していました。驚愕のあまり思いました、マリー、マリー、なんてこった、その屠殺台の上で二人はなんと喘いでいることか「・・・」なんてこった、殺しあい、首の絞めあい、殴りあい、殺しあい。互いに殺し合うつもりだぞ。わたしは叫びました、お嬢さん、これは何をやっているのだと驚いて、わたしは叫んだのです、「た、た、た、た、たすけてー！」と叫び、もう一度「た、た、た、た、たすけてー！」すると呻き声は突然収まり、罵りの声が屠殺室から聞こえてきました、まだ一度も聞いたことのないような罵り声。それはわたしに向けられたものでした、わたしの名前が中庭に向けて怒鳴りあげられたのです。わたしは身をかがめ、そして立ち上がり、走って桶の背後に隠れました。空にはまん丸い月がありましたが、父はもうその背の高くて恰幅のいい姿を中庭に現し激怒し、わたしの名前を夜のなかに怒鳴っていました。わたしはぎくっとしました——雷電にうたれたようにぎくっとし、桶の背後から這うように出て行くと、彼はその真摯で暗い両眼でわたしを見つめました。彼のまゆ毛はふだんよりはるかに太くてごわごわしているようでしたが、わたしを見つめまったく平然と部屋の中に上がるように、部屋の中に上がるようにと命じたのですが、その調子はわたしの骨の髄までしみ通るような調子でした。その調子はとても落ち着いていて、とても不気味な、そんな調子だったのです。そしてなぜだかわかりませんが（だってそうする理由はなかったのですから）、お嬢さん、おわかりですね、でも身を震わせながらわたしはそれに従ったのです。わたしたちは黙りこくって住まいの中へ上がると、父はソファの上に腰を下ろし、自分の前にひざまずくように、自分の前にあるじゅうたんの上にひざまずくように命じ、両腕をのぼすように、前方にのぼすように命じたのでした。わたしはひざまずき、両腕をのぼし、ひざまずきましたが、彼は殴りませんでした。父は沈黙し、凝視し、わたしを凝視していたのです。それからわたしは泣きだしました。非常にみじめに泣きだしました。しかし父

は沈黙し、凝視していたのです。永遠に、凝視していたのです。わたしはひざまずき、両腕をのぼし、泣いていましたが、涙を拭い去る勇氣はありませんでした。そうする勇氣はなかったのです。おわかりですね、お嬢さん。それから痛みがわたしの両腕に入りこんできました——それは激しい痛みでした。わたしは泣き、嗚咽していましたが、父は沈黙し、凝視し、沈黙していたのです。彼は動かず、憐れむこともなく、何もすることなくただ沈黙していたのでした。わたしは泣き、両腕をのぼしていました。しかしすべては静かでした。父は静かで、万物は静かでした。そして父は沈黙していました。神は沈黙し、沈黙し、沈黙し、沈黙していたのです。わたしがもはや泣くことができなくなるまで。単純にもはやそうすることができなくなるまで。それからわたしは自分の部屋に駆けてゆき、ベッドの中にもぐりこみましたが、苦しみのあまりもはや泣くことはできなかつたのです。おわかりですね、お嬢さん、もう泣くことはできなかつたのです。そしてあの夜以来わたしは放蕩息子となりました。わたしは放蕩息子で自分の神を失い、神を失い、もはやそれを見つけることはできません。どの場所にも、どこにも見つけられないのです。それは消え去り、失われ、沈黙によってこなごなに砕け散つたのです。おわかりですね、お嬢さん。わたしは探し、車を運転し、探していますが、もはやそれを見つけることはできないのです。わたしはそれを決して見つけることはできないのです。それはいなくなり、わたしもいなくなりました。そしてどんなに探しても、無駄なのです。おわかりですね、お嬢さん、どんなに探しても、無駄なのですよ。

後に母が旅から帰ってきたとき、わたしは黙っていました。墓のように黙り、黙りこくっていました。父も黙り、マリーも黙っていたように。わたしたち皆が黙りこくっていたのです。それですべてがよかつたのです、お嬢さん、すべてがよかつたのです。それからすぐに、マリーが出て行かなければなりませんでした。彼女がどこに行ったのか、わたしは知りません。しかし沈黙は残りました。後に母が、彼女はパリで女の子を産んだのだよと語ってくれましたが、それ以上のことは語ってくれませんでしたし、わたしもまたもはや語ることは

ありませんでした。父の眼に対し、父のこわばった眼差しに対し、恐れを抱いていたので、わたしは黙っていたのです。彼女が知っていたかどうか、わたしは知りません——わたしがぜひ知りたかった多くのことを、知らなかったように。しかしわたしはあまりに臆病だったのです、お嬢さん、あまりに臆病だったので、知るために質問することはできなかったのです。しかし今となっては遅すぎます。

母が死に（その死は長くはかかりませんでした）、父も彼女の後を追うように死んでいきました——苦痛に身を屈めて。彼はバルセロナに知人を訪問するために、二十年来初めて休暇旅行をしました。一度も旅をしたことのない彼が、その人生はただ義務と仕事だけであった彼が。実は彼は遠方の地で死ぬために、旅に出たのでした。彼の死はわたしにとってただ単に大いなる安堵を意味していただけでなく、またすさまじい苦痛、ほとんど耐えることのできない重荷をも意味していました。スペインで父の遺灰が詰まった壺が手渡されたとき、わたしは茫然自失の状態でした。すべてのものの輪郭がぼやけていました。現実の生と夢とは、愛と死とは、ドアと通路とはもはや判別できなくなっていました。わたしの人生のいわば正面玄関に鎮座する像が、両手のなかの壺に納まっていたからです。わたしはその黒い壺をたずさえて、行人たちのかたわらをすり抜けバルセロナの商店街を歩いて行きました。カタルーニャ広場、ランブラス通り、ポケリア通りを歩いたのです。これらのせかせかした通りをうろついたので。そこは人々が行きかい何台ものバスが走るビジネスとショッピングの街でしたが、わたしは父を小脇にかかえてそこを彷徨っていました。とても奇妙な気分が襲われました、お嬢さん、とても奇妙な気分。遺灰入りの壺をプラスチック製の買物袋につっこむなんてことは、本来わたしには思いもよらないことだったでしょうが、わたしの精神状態はそんなことを思いつくほどに混乱していたのです。泊まっているホテルの門番のかたわらをこそそこそとすり抜け、自分の部屋に入りました。わたしはそこで父を机上の花瓶の横に置いたのですが、どうすればよいのかわかりません。興奮、悲しみ、恥

じらいのあまり、ほとんど息もできないほどだったのです。それから父を窓の下枠の上に置きましたが、それはまだ如何ほどかを、つまり人世の如何ほどかを彼に見えるようにするためでした。それからわたしは父を床の上に、さらには浴室の中に置きましたが、最後には彼をタンスの中にしまいました。なぜなら彼がわたしを凝視するように、壺の中からわたしを非難に満ちた眼差しで凝視するように感じられたからなのです。その夜は長く怖ろしく、眠れませんでした。たえずあの夜のことを考えずにはいられなかったのです。わたしは壺をタンスから取り出してソファの上に置き、その前にひざまずき凝視し、泣いて泣いて泣きましたが、それはいろんな可能性がすべて台無しになったためでした。突然ヒソヒソ声わたしの泣き声に混じってきたのです、お嬢さん、そっと静かにヒソヒソ声が。でもこの声は執拗に聞こえてきたので、脇に追いやることができませんでした。それは骨壺からヒソヒソと聞こえてくるように思われました。わたしが生前父の言を理解できたことは、決してありません。耳をそばだてて聞き入りましたが、今度もわたしには彼のヒソヒソ声をいつているのか、理解できませんでした。彼は壺の中にあり、ヒソヒソ声はそこから聞こえていたのですが。それからわたしは絨毯にひざまずき凝視しヒソヒソ声を聞いていましたが、心は不安と屈服と反抗心との間で揺れていました。結局わたしはその壺をつかみ真夜中にホテルを出たのです。海へと向かいました。満月で、その青白い光は人のいない浜辺を照らしていました。わたしは父の遺灰を両手の中でグルグル回したり逆さにひっくり返したりしたのですが、それをどこにやったら良いものかさっぱり見当が付きません。満ち潮で海水がどっと押し寄せていました。わたしの心はあの夜と同じくドキドキ高鳴っていました。それからわたしは父を海に投げたのです。それが憎悪のためだったとは思わないでください、お嬢さん、それだけはよしてください。わたしはわたしの、貴女の父を愛していましたし、まだ相変わらず愛していますし、まだ彼のことをしばしば、とてもしばしば考えるのです。彼のヒソヒソ声だけを、お嬢さん、おわかりでしょう、彼のヒソヒソ声だけを。

後書き

以上がダニエル・ツァーノの短編小説『ヒソヒソ話』のほぼすべてである。以下は訳者の筆になる後書きだが、『ヒソヒソ話』の語りの構造ならびに語りの前提となる感覚の使用に関するものである。これも前書きと同様、作品理解の一助になるものと信ずる。

まずこの短編にはタクシー運転手の「わたし」という語り手がいて、「お嬢さん」というタクシーの客に求められて、過去を回想しながら物語る。話の結末でようやく、この「お嬢さん」（原語はフランス語の「マドモワゼル」）が父親と情事をともにした使用人の女性の娘であることが明かされる。出産した場所はパリであった。つまり彼女は主人公の「わたし」の、母を異にする妹なのである。読者はいわばこのお嬢さんの耳を頼りに物語を聞くという構成になっている。

話し手であるタクシー運転手の語り方に関して注意をひかれる点は、彼が人間の感覚によって感じ取った外界の出来事を物語っている、ということである。まず聴覚、視覚について見てみよう。例えばエリアス・カネッティの自伝『耳の中の松明』⁵⁾と『眼の遊び』⁶⁾も、周知のようにそれぞれの題名がすでにこれら二つの感覚を示唆している。ツァーノの短編の場合、それはカネッティのように明瞭に示されていないが、聴覚と視覚という二つの感覚による外界認知を念頭において『ヒソヒソ話』を読めば、この短編がいかに入念な書き方によって成立しているかがよく解るのではあるまいか。その題名自体が聴覚を暗示しているし、物語の夜の場面に出てくる月の光は当然のことながら語り手であるわたしが視覚によって感知したものにはかならない。肉屋の作業場の白い壁、動物の体から流れる赤い血、月の青白い光といった色彩の対比も見事であるが、それもまた視覚領域に属するものだ。またこの短編に類出する沈黙は本

⁵⁾ Canetti, Elias: *Die Fackel im Ohr. Lebensgeschichte 1921 bis 1931*. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1986.

⁶⁾ Ders.: *Das Augenspiel. Lebensgeschichte 1931-1937*. München (Hanser) 1985.

来音とは正反対のものであるが、音と同様に耳によって認知されるものであろう。

カネッティはもう一作自伝をものにしてしているが、その題名は『救われた舌』⁷⁾である。舌はいうまでもなく味覚と話す能力を表しているが、ツァーノのこの作品の場合『ヒソヒソ話』という題名がすでに後者の能力をも示唆し、父親の職業である肉屋は前者の味覚を示唆していることは明らかである。その上この短編小説の場合には、嗅覚が加わってくる。つまり屠殺動物の流す血液や肉の臭いがそれである。こういう具合なので、音、光、色、味、臭いという外界から感知されるものと、感知する主体たる人間の持つ聴覚、視覚、言語能力、味覚、嗅覚が密接にからみ合いながら物語が進行するのである。言い換えれば、語り手はこれらの感覚の網をはりめぐらし、外界の事象をことごとくこの網でからめ捕る。そしてこのからめ捕り、つまり感覚網による事象のすくい捕りこそは、まさに語りの前提となる行為と考えられよう。

さらに父親の毛深い手に触られてみたかったという主人公の思いが表すのは、当然のことながら触覚である。また遺灰がつまった壺の中から父に凝視されているとか、そこからヒソヒソ話が聞こえてくる気がするという「わたし」の想いは第六感であろうか。したがってこの原書にして十五頁ほどの短編の中に、そこにはりめぐらされた人間の六つの感覚網を読み取ることができるわけである。そのように細かい配慮をもって念入りに物語る能力を所有しているのが、語り手である「わたし」の舌にはかならない。そして聞き手である「お嬢さん」の耳を通じて、読者は昔の出来事の仔細を知るという設定になっている。

底本としたのは Zahno, Daniel: *Tuscheln*. In: ders., a.a.O., S. 7–21 である。

追記：この短編小説の翻訳権は訳者荻野静男が所有する。また本訳載は『ヒ

⁷⁾ Ders.: *Die gerettete Zunge. Geschichte einer Jugend*. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch) 1986.

『ソヒソ話』のほぼ全文を提示しているが、わが国における大学発行雑誌での掲載という事情を考慮し、原文にして数行分（上記底本17頁25～26行目にかけて、及び同頁29～30行目にかけて）を割愛せざるをえなかった。その点、著者であるダニエル・ツァーノには大変なご迷惑をおかけした。ここで心よりお詫びすると共に、「重苦しい心持ち」（„schweren Herzens“）ながらもかかる事情を賢察し、省略の許可を与えてくれたことに深謝したい。